

平成 30 年 3 月 19 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部 3年	性別	男
卒業/修了 予定年月日	2020年3月		

2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2017年 5月 1日	終了年月日	2018年 1月 20日
留学のタイトル	オーストラリアにおける Japanese Assistant program			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700字程度）				
<p>今回の留学の目的の一つは、自分の英語学力の向上である。今回のプログラムは、オーストラリアの小学校において、日本語の先生のアシスタントとして授業を行い、<u>オーストラリアのネイティブ社会の一人として留学を行ったため、日本人と関わる事がほとんどなかった。</u>そのため、<u>英語でしか生活できない状況に自分の身を置くことが出来たため、英語力の向上が望めたといえる。</u>二つ目は、私は将来教員を目指しているため、オーストラリアの教育現場でアシスタントとして授業を手伝ったことで、将来教員になった時に今回の留学の経験が大きくいかせると考えている。現在、法文学部に在籍のため、教育学部の学生と比べて実際の教育現場での機会が少ない。そのため、今回の留学において実際の教育現場に身を置けたことは自分にとって大きな経験になったといえる。外国語学習における指導法や注意点について学ぶことができたことから、私が外国語を教える際にも、留学をいかして教鞭をとることが出来る。</p> <p>留学の概要としては、オーストラリア、キャンベラの Evatt 小学校において外国語教育として日本語を教えた。その日本語の授業にアシスタントという形で、授業に参加した。具体的な内容としては、<u>授業のテキストの準備、個人的な質問への対応、授業計画立案が主な内容で、イベントごとの運営や手伝いなども行った。特に生徒との日本語でのコミュニケーションに力を入れた。</u>また、その際、<u>写真やテキスト、動画を用いて日本語、日本の文化、日本の魅力についても子どもたちに伝えることを意識し、授業に取り組んだ。</u></p>				

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

(1) 受入れ機関情報

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関	3ヶ所目の機関
国・地域	オーストラリア		
都市名	キャンベラ		

機関名 (英語)	Evatt primary school		
機関名 (日本語)	エバット小学校		
受入れ 機関 URL	http://www.evattps.act.edu.au/		

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (9) ヶ月 / 授業料申請 (有・無)

年 月	留学先機関	国・地域	主な活動
2017年 5/1~1/19	Evatt 小学校	オース トラリ ア	現地の小学校にて、授業のサポート

(3) 参加したプログラム (有・無) (複数選択可)

本学の協定校交換留学	名称記入	本学の協定校交換 留学以外のプログラム	JTA プログラム
本学以外の機関に よる留学プログラム	名称記入		

4. 留学の成果及びその測定方法 (300 字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力	○	その他	
<p>成果発表：帰国後、人文学科所属の Steve Cother 教授の指導を仰ぎ日本語教師のアシスタントと一緒に留学した五人の学生と、大学内(教育学部)にて鹿児島県内で小学校の教師として働いている方及び教師を目指している大学生に、留学中に得た知識、体験を伝え、共有した。現在、日本では小学校からの早期英語教育が始まっているが、小学校教員の英語技術力・指導力不足が指摘されており、かつ教えることに不安を抱いている人も数多くいる。内容は、オーストラリアの小中学校での日本語指導法で、留学に行った五人は別々の学校に配属されていたため、学校ごとに異なる特色のある授業方法を伝えられた。また、小中一貫校に行った学生もいるため、授業法のみならず小中学校間での協力・連携など技術面以外の体験も伝えられた。</p> <p>外国語能力の向上においては、英語能力検定の取得と、TOEIC の点数向上において留学成果の測定方法とする。</p> <p>私が留学したオーストラリアのキャンベラでは、日本語教育が盛んにおこなわれており、私のオーストラリアの教育現場での経験を伝えることで、微力ではあるが英語教育の発展に貢献できた。</p> <p>(TOEIC スコア 635 点：2018 年 5 月時点)</p>							

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4.も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

(500 字程度)

留学の一つの目的として英語力の向上を挙げていたが、実際のオーストラリアの社会に身を置くことは、自動的に日本語から自分を離すことにつながった。その結果、自分の英語力の向上につながったといえる。特に、ネイティブスピーカーと実際に生活することによってのスピーキングとリスニングの向上が大きかった。帰国前は、実際に TOEIC を受けたことが無かったが授業などで受けたものは 550 点ほどだった。5 月 20 日に、TOEIC を受験するので英語力がどれだけ向上したかは、その点数で把握できる。

二つ目の目的として挙げていた教育活動の実践については、現地の小学校にて実際の教育現場に携わることで、教育の難しさや、生徒とのコミュニケーションの取り方などを知ることが出来た。そのうえで、実際に授業内容を先生と話し合っ て計画してみたり、先生が休んだ時には自分で実際に授業をおこなったりと、貴重な体験をすることが出来た。自分が大学で学んでいたことだけでは決してわからない部分である実際の現地での生活や、ネイティブスピーカーがどのような英語を話しているのかなどについて触れることが出来たことが、今回の留学において一番大きく得た経験だといえる。

英語力の向上と、教育活動の実践という目的を挙げていたが、達成することが出来たと自分の中では感じている。もちろん、英語力もまだまだ伸ばしていかなければならないと思う部分もあり、また教育活動に関しても今後の教育実習、また将来、教師となったときにどう生かしていくかが課題と思っているため、留学で得た、英語力やどのように生徒たちに教えられるのかなどと課題についてしっかり考えていかなければならない。

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500 字程度)

留学後に、鹿児島県内の小学校教員や、英語教師を目指している大学生に対して、プレゼンの発表を行いたいと考えている。実際にオーストラリアの外国語教育の授業法や、指導法を伝えることで、現在の鹿児島県内の小学校教育に対しての教員の不安を少しでも取り除いたり、学生の教師になるための意欲につなげていけたりできればよいと思う。自分の親も小学校の教員であるが、英語技術がほとんどなく、どのように英語を教えたらいいいのか、どうすれば英語が楽しいと思えるようになってくれるのかを悩んでいる。そのような、鹿児島県内の小学校教員の参考に少しでもなることが出来れば幸いだと考えている。また、日本の文法重視の英語教育の在り方や、鹿児島の英語教育の在り方と、海外の外国語教育の授業法を比較・考察してみ、どのようにすればより良い英語教育が行えるかを考え、卒業論文にもつなげていけたらと考える。そして、鹿児島における英語教育の指導法の向上が、鹿児島県内の学生の英語力向上につながると思う。また、現在、私は鹿児島県内の学校教員を目指しており、今回の留学において学んだことを将来自分が学校教員になった時に、オーストラリアで学んだ外国語指導法はもちろんのこと、教育技術以外の子どもたちとのコミュニケーション方法などを生かし、子どもたちに英語の楽しさを伝えていきたいと考えている。そして、鹿児島の英語教育の発展に少しでも貢献できるように、今回の留学での経験を自分の力にしていきたいと思う。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500 字程度)

今回、留学して自分の生き方について考えさせられる部分が多くあった。実際に教育現場でアシスタントとして働いてみて、生徒たちにどのように理解しやすいように教えられるのか、またどのように生徒たちとコミュニケーションをとっていくのか、また生徒にうまく伝わったときの感動など、教育の難しさや楽しさというものを学ぶことが出来た。そのうえで今回得た経験というものを、今後の教育実習、そして教師になった時に他人とは違った形で役立てていけるのではないかと思う。

また、自分の英語力のなさを今回の留学において痛感させられた。そこから、自分でもっと英語に対する意識が高まる形となった。また、英語だけではなく、オーストラリアにはいろんな人種の人や、いろんな言語で話す人たちがいたため、自分ももっと多様な言語を話したいと思うようになった。英語だけでなく色々な言語を学んでいくことは、様々な国の人たちと話すこと

ができるようになる上に、現代のグローバル化といわれている時代においては自分の将来に大きくプラスになることであり、そのきっかけを今回の留学でつかむことが出来た。

留学して得た英語力や日本語を実際にオーストラリアで教えていた経験というのは、自分が将来教師になった時にどのようにして生徒たちに外国語教育をおこなっていくのかという点について役立てていけるのではないかと思う。今回自分が教えていたのは日本語と文化だったが、学習者に外国語を教えるという点は同じなので、鹿児島における英語教育について、少しでも将来微力ながら力になっていけるのではと考える。

平成 30 年 2 月 15 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

所属/学年	法文学部 3年	性別	男
卒業/修了 予定年月日	2020年3月		

2. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。（700字程度）

【活動のタイトル】 Japanese Teacher Assistant プログラム成果発表会

【活動の期間】 2017年5月20日～2018年2月4日

【活動の概要】

今回、私が行った留学は、実際に小学校に行き生徒たちに日本語を教えるといったアシスタントだった。そのため、他の語学留学した学生とは少し違った形での留学を行ったといえる。実際にオーストラリア人が外国語を教える際の授業方法や、指導法を学ぶことが出来た。近年、日本では2020年に向けて、英語教育に力を入れつつある。もちろんそれは鹿児島でも同じであり、英語教育に関して考えていかなければならない。そのことから、今回、私たちが行った留学の成果をもとに、微力ながら、鹿児島の英語教育の発展に力になれるのではないかとこの活動を行った。

活動の具体的内容としては、鹿児島県内の教員や教育関係に携わっている人、また将来教師を目指している大学生に対して、鹿児島大学の教育学部の講義室を借りて、プレゼン発表を行った。実際のオーストラリアでの外国語指導法を伝えることで、日本の外国語教育とどのように違うのか、また日本の英語教育の中にも、何か取り入れられるものはないかという点について発表しようと考えた。各自、自分がクローズアップするテーマでスライドを作成し、その後全員のスライドをつなげ、プレゼン作成を行った。私が行ったテーマは、オーストラリア人が教える日本語というテーマだった。ネイティブスピーカーではない、オーストラリア人が実際にどのようにして日本語を教えているのか、どのように工夫して生徒に授業を行っているのかという点について着目した。具体的には、オーストラリア人が日本語に対して、話したり聞いたりするだけでなく、読みや書きの四つの技能をバランスよく教えていることや、生徒にわかりやすく教えるために、歌を作ったり、動画サイトで日本の祭りや文化をみたりと生徒により興味関心を持ってもらう工夫を行っていたことについて発表した。

日本の英語教育においても英語の先生や、小学校の先生はネイティブスピーカーではない場合がほとんどなので、今回の発表が鹿児島県の小学校の先生方や、将来、教師になろうと考えている人たちにとって何かプラスになるものが得られるのではないかと考えた。実際に発表の日には、10人から15人の先生や大学教授、学生も参加していただいた。

3. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700字程度)

上記の通り、鹿児島県の英語教育の一助となることを目的として、鹿児島県内の小学校の先生や、大学教授、大学生に対してプレゼン発表を行った。発表後は、実際に JTA がどのように授業に携わっていたか、生徒にどのようにコミュニケーションをとっていたかなどの様々な意見交流や、質問等があり、有意義な時間を過ごすことが出来た。将来の英語教育について、また今の日本の英語教育の問題点を教授などと話し合っ、ALT の存在が大きく外国語教育の現場では関わってくるということについて議論を交わした。現時点では、日本における ALT の存在が、今回私たちが行った JTA とは大きく関わり方が違うことから、どのように ALT を今後の英語教育において活用していくべきなのか、今の教育現場ではどのように ALT が活用されているのかと ALT の重要性をお互いに話し合うことが出来た。今回の発表が、少しでも鹿児島県の英語教育の活性化につながったと思いたい。今後の課題としては、今回の留学によって培われた自分の英語力と、現地にて学んできた授業内容や、指導方法、工夫等を将来にどのように役立てていくのかと思う。英語力等については、TOEIC や英語検定等によって、伸びを可視化し維持していきたい。具体的には、5月20日に TOEIC を受験する予定である。

スピーキングに関しては、留学生との交流等によって、維持していきたいと思う。また自分は将来、英語教師になりたいと考えている。今回の留学で学んだどのように学習者に言語を教えるべきなのか、コミュニケーションをとるべきなのかといった経験を、自分が将来教師になった時や、教育実習の際に役立てていきたいと思う。日本では大学受験が重要視されていることから、読みと書きに重点を置いているが、オーストラリアは読みと書きに加えて話すことと聞くことも重要視している点で、オーストラリアと日本では外国語教育の重要としている点は確かに異なるが、現地で学んだ生徒とのコミュニケーションの取り方や、どのようにわかりやすく学習者に言語を教えるかなどの工夫などを活かしていけると考えている。自分が教師になった際は、今回の留学で学んだことを、鹿児島県の英語教育を活性化するために微力ながらも貢献していきたい。そのためにもより一層、今後の自分の英語力と教育方法について考えていかなければならないと思っている。